

2023年、新しい年が始まりました。いかがお過ごしでしょうか。

大海原を航海する巨大な船の船長や機関長などの海のスペシャリストをめざして、また高度な情報技術をベースに機械や制御システムのスペシャリストをめざして、日々努力する学生のみなさんを本校はしっかり応援します。

CC (Climate Change, 気候変動) を背景に新型コロナウイルス (COVID-19)、国際紛争は、世界経済と物流に大きな影響を与えて情報通信、海運ロジスティクスに対する人々の関心を否応なく高めました。首相官邸の年頭所感では、グリーン、デジタル、スタートアップ、イノベーションの4つのキーワードが示されました。最初の2つは、それぞれGX、DXと言い換えられます。GXとはGreen Transformation、DXとはDigital Transformation、というように横文字が並びますが、本校の各学科の卒業生には、社会から大きな期待が寄せられています。電子機械工学科と制御情報工学科の学生は、卒業研究を5年間の高専生活のフィニッシュとして情報機械システム工学科の後輩にバトンを渡して巣立ってください。そして、ルーツを辿れば明治8年(1875年)まで遡る商船学科、そして情報機械システム工学科はまさにこれからの社会を牽引する“今、必要な学科”なのです。

人が育つには、憧れる大人の存在、若者を理解してくれる大人の存在、このような大人や社会が示す基準、仕事があること、能力を発揮できる仕組みがあること、そして時間があることとされています¹⁾。今の人の生き方の基準として公共や他人を利すること(利他)の認識が十分ではないのではないかと問われています。一方、ドイツの名門ボン大学で、史上最年少で教授になった哲学者マルクス・ガブリエル教授は、日本の文化は非常に精神的な文化で、「お互いの気持ちが手にとるようにみえる(精神の可視化)」とし、これからの国際社会について道徳や倫理、連携の重要性を説いています²⁾。私たちがこれまで培ってきた独特の社会文化、精神文化のなかで志と思いやりをもって育ち、仕事と社会で能力を発揮し、人と社会のために貢献して欲しいものです。国際社会全体の持続可能性が問われる昨今、「海外とのふれあい」を大切にしなければなりません。本校はこれまで、アジアからの留学生を受け入れ、シンガポールなどにも学生を派遣、トビタテ!留学JAPANにも採択の成果をあげてきました。今や海外とのふれあいはオンラインを交えていろいろなツールで可能になっています。もっとも「百聞は一見に如かず」ということもあります。自身の体験も含めて次号に続けていきます。

現在、本校では教職員一体となって練習船「新鳥羽丸」の設計と建造に同期した「浮き桟橋」の架け替え、さらには、寮地区の「国際寮(多文化交流生活寮、MELD)」の整備計画が着々と進められています。これらは、今後の校舎地区の青写真とともに「キャンパスマスタープラン2022」としてとりまとめられていく予定です。これらの設備や環境に魂を入れて共創するのは、学生諸賢、教職員はもとより関係官界、海運・海事をはじめとする産業界、

鳥羽商船高専を暖かく見守っておられる同窓生、学生の保護者の方々、地域の方々です。感謝です。

12月以降、新型コロナウイルスの感染者数の増加とともに、入院者数も増加しており、インフルエンザとの同時流行の可能性も見据え、しっかりとした対策をとらなければならない状況です。また、政府において、オミクロン株への対応、インフルエンザとの同時流行に対応する形で基本的対処方針が変更されており、基本的な感染防止対策を怠らないように十分にご注意いただき、引き続き適切な対策の実践をお願いいたします。とりわけ免疫力を高めることに注力しましょう。

1) 安藤 博（法学者）2022年10月

日本教育新聞社

2) 「世界史の針が巻き戻るとき」2020年2月

PHP新書 世界の知性シリーズ